

17) 胆嚢癌の発見経緯と進展度

佐藤 敏輝・吉村 宣彦 (厚生連中央総合  
原 敬治 (病院放射線科))

胆嚢癌50例の発見経緯と進展度の関連について調べた。平均年齢は71歳、男女比は16:34であった。組織検索で発見されたものが3例、術中に発見されたものが3例、画像で発見されたものが44例であった。組織発見例は、3例とも慢性胆嚢炎(胆石)で切除されており、術後の組織検索で偶然発見された。進展度は3例とも stage I であった。術中発見例は、3例とも急性胆嚢炎の術中に発見された。stage はそれぞれII, III, IVと中等度から高度に進展していた。US, CT では胆嚢壁の均一な肥厚のみで炎症性肥厚との鑑別が困難であった。画像発見例は44例あり、8例が切除可能であった。いずれも高い隆起を示しており、US で診断された。最小のものは最大径 2.2cm であった。進展度は stage I が3例、II が1例、III が4例であった。切除不能例(36例)は、上腹部痛、黄疸、肝機能障害などを主訴としていずれも US で発見されたが、肝床浸潤、リンパ節転移、肝転移が高度のものが多かった。

18) HEPATIC PORTAL VEIN GAS-HPVG

—Report of 2 cases—

Mauro NAKAYAMA M.D. (Department  
Makoto SHIINA M.D. (of Radiology,  
Kunio SAKAI M.D. (Niigata Univ.))

Hepatic Portal Vein Gas (HPVG) was first described by Wolf and Evans (1955) in infants with necrotising enterocolitis and was associated with a grave prognosis. Although a large number of pathologic conditions have been reported to accompany the visualization of HPVG, most cases are associated with bowel necrosis. Urgent surgical exploration has been recommended in greater number of cases. Mortality is approximately 75%.

We report on 2 patients in which HPVG was associated with ACUTE GASTRIC DILATATION and COMPLICATION OF ENDOSCOPIC PROCEDURE, conditions that do not require surgical intervention and the HPVG was rapidly absorbed without untoward sequelae.

19) 胆道癌放射線治療症例における Expandable Metallic Stent による Biliary Endoprosthesis

斎藤 明・山本 貴子 (県立新発田病院  
放射線科)  
関根 輝夫・篠原 敏弘  
原 秀範・堀 聡彦 (同 内科)

平成元年11月より4年10月までの3年間で黄疸をとまなう胆道癌の放射線治療例16例(肝外胆管癌10例、胆嚢癌兼胆管浸潤6例)に Expandable Metallic Stent による Biliary Endoprosthesis を施行した。放射線治療は外照射 46~50 Gy を基本とし、一部の例で腔内照射を追加した。Stent 設置、Tube 抜去、減黄は全例で成功した。Stent 失効による黄疸再発は4例にみられた。Stent 設置後6か月においては、生存例は8例で、うち6例は黄疸再発がなかった。胆道癌放射線治療例における本法は、初期成功率、有効期間、胆管炎合併率いずれも良好で、患者の QOL も高く、有用な方法であると思われる。

20) 咯血に対する BAE

三浦 努・安住利恵子 (長岡赤十字病院  
放射線科)  
清野 泰之  
水沢 彰郎・桶谷 典弘  
江部 達夫 (同 呼吸器科)

咯血に対する気管支動脈塞栓術(BAE)は、広く施行され、良好な成績が得られている。当院で、過去4年の間に12例の BAE を施行し、その治療成績について、検討した。

塞栓術による咯血に対する即時効果は12例中11例(92%)で良好であった。

12例中1例に塞栓後の即時効果はみられたが咯血の再発がみられた。

血管増生や気管支動脈以外からの血管支配が強い症例では再発しやすく、気管支動脈—肺動脈および体循環動脈—肺動脈短絡のつよい症例では外科療法を考慮する必要があると考えられる。

BAE は咯血に対する初期治療として有効であり、長期予後についても期待できると考えられた。